あとがき

編集委員　藤岡 達也

昨年7月に成立した「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」についての今後の動向が注目される。この法律の第一条にもあるように「健全で恵み豊かな環境を維持しつつ、環境への負荷の少ない健全な経済の発展を図りながら持続的に発展することができる社会」の構築は誰もが願うところであろう。しかし、基本方針作りの背景とのなる日本の現状を見ると、国内経済の課題、イラクをめぐる外交問題等と文字通り「内憂外患」となっている。解決策として即効薬はなく「国家百年の大計」と言われる「教育」にしか期待できないと言っても過言ではない。「自ら学び、自ら考え主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」の今日的な教育のねらいは今の日本にとってもこれからの日本にとっても不可欠であろう。

さて、その中で学会発足以来の学会員による「環境教育」への取組は時代の先駆的なものと考えている。そのため、学会誌「環境教育」のもつ意義は大きい。ただ、投稿論文が最近増えつつあるとしても、会員数など全体的に見た場合、渡邊編集委員長が「ニュースレター（第60号）」で投稿を呼びかけておられるとおり、少し寂しい。今年度から特集号を含めて年刊3巻の発行が予定されているが、多くの実践や教育が掲載され、さらには発刊数がより増加されることを願っている。

同時に自分が危惧するのは、論文の投稿数だけでなく、掲載された論文等が意外と会員にも読まれていないと聞くことである。著者だけでなく、査読者や編集委員会の労力を考えても惜しい気がする。「環境教育」だけでなく、他の学会誌でも似たようなことを聞く。なかなか日本人は、他の人の論文をじっくり読み、それを高く評価することが少ないようにも思える。国内で評価されなかったものが海外で評価され、それが逆輸入されることは珍しくない。前号のあとがきにおいて、樋口編集委員が引用文献の重要さを指摘している。その中で「文献を読むことはアイディアの源である。実践や調査が一つの車輪であるならば、文献はもう一つの車輪である。」と書かれているが、研究者にとって疑問の余地はないだろう。

論文だけでなく、活動的な外国人と話していて感じるのは、自分の主張も語るが、こちらの話を聞こうとする真剣な姿勢が常にうかがえることである。現在、学校教育の中でも低学年から発表する方法や技術等は重視されている。しかし、人の話を聞く力の育成や他の人を評価する姿勢も重要であろう。これまで多くの「環境教育」や「総合的な学習の時間」の実践を見てきた。その中で、日常の体験からなのか、子どもにとっても自分が発表すること、語ることは割と熱心であるように思える。しかし、人の話をじっくり聞くという点では物足りなさを感じることが多い。

個人的ではあるが、最近、「環境教育」だけでなく、多くの学会で査読を頼まれることが多くなった。その場合でも、最初は内容に疑問を思っても、読み返すと著者の思いが伝わってくることが多い。ただ、少し、表現等が足らなかったり、論理に飛躍があったりしただけのことである。場合によっては自分の不十分な読解も浮かんでくる。(もっとも従来から自分は「人にはやさしく、自分にはより甘く」という体質が備わっているからかもしれないが。)

「環境教育」を通じて、人の意見を聞き、自分との違いを理解した上で、相手の立場も尊重することができる姿勢を小学生から研究者までにも望みたい。確かに世間では養老孟司氏の「バカの壁」で述べられているように、お互いの理解は不可能なことも多いかもしれない。しかし、この姿勢をもつ「環境教育」の実践や研究の視点が結果的には混沌とした国際政治や経済にも反映されることに繋がると考えたい。